



老いた4行教授から悩み多き若者への伝言

五十嵐泰夫

私は今、ものすごく後悔・反省している。なんでこんな原稿執筆を気楽に無責任に引き受けてしまったのだろう。「私のバイオ履歴書」といっても、私は和田秀樹氏が「東大の大罪」という本の中で批判している「東大卒、東大助手、東大助教授、東大教授」と履歴書が4行で書ける「4行教授」の典型である。いやそれよりもっとひどい。20歳で入室した研究室に64歳の定年退職まで居座り続けた、動くことを知らない「植物教授」である。「植物学の教授」ではない。「こんなつまらない人生を送ってはいけない」という1行を加えても、5行でこの原稿は終わってしまう。これでは生物工学の道を歩む若い人たちへのなんのアドバイスにもならない。私はこの年齢(67歳)になってもまだ筆は速い方で、8000字くらいの原稿なら一晩二晩で十二分量の粗稿を書き数日後にリファインするだけで、一週間もあれば済んでしまうことが多い。ところが今回は書き始められないのである。それでこんなひどい書き出しになってしまった。それにしても最近の私の原稿は長い言い訳から始まることが多いのはなぜだろう。

初めて悩んだ

そもそも私は幼少の頃から物事を深く考えたことがなく、あまり自分の生き方で思い悩んだことがない。ちなみに恋に悩んだこともほとんどない。そんな私が自分の将来のことで初めて文字通り「身も細る」ほどに悩んだのは大学卒業の時だった。東大闘争の直後のことで、私は魅力を感じなくなっていた大学を離れて、ある民間企業に就職することを早々に決めていた。ところが卒業研究を始めたらこれがひどく面白くなって、大学に残ってもっと研究がしたくなった。しかしこの就職に際してはお世話になった方々もおり、また大学院の入試はとっくに終わっていて、大学院に入るには一年遅れて翌年の入試を受けなければならない状況でもあった。さらに大学生時代、お酒・麻雀その他で遊び呆けていた私には大学院入試に合格するという絶対の自信もなかった。それで

おそらく人生で初めて本当に悩んだ。2週間くらい、食べ物もろくに食べず、お酒も飲まず(本当です)、ふとんの中でどうすべきか考え続けた。そうしているうちにもともと体力のあまりない私は頭がぼうっとしてきて、何が何だか分からなくなって、一日二日して頭が再びはっきりしてきた時には「大学院に行く」と決めていた。いや、決まっていた。頭で考えて出した結論ではなくて、自分の体が自分のしたいことを決めてくれた感じだった。もっともこの結論の出し方、私がかつて強靱な体力の持ち主だったらどうなっていたかはわからない。また大学院進学を決めてからの約半年間、私は大学に入って初めて本当に必死に勉強した。この時の蓄積がその後どんなに役に立ったことか計り知れない。

そしてまた悩んだ

次に私が自分の歩むべき道で大きく悩んだのは、19か月のアメリカでのポストドク生活を終えて日本に帰国する時だった。進学の悩みからすでに10年が過ぎ、私は卒論と同じテーマで博士号を取得、出身研究室の助手となり、波乱も悩みも少ない人生を送っていた。アメリカでの生活も親子3人で楽しくやっており、研究も渡米後一年くらいで先の目処が立って、すべては順調に推移していた。そんな状況で日本に帰国しなければならないことになった。ここで帰国しなければ大学の助手を辞職しなければならない状況であった。一方でなぜか「ここで帰国したらもうサイエンスの世界でBIGになるチャンスはない」という予感があった。しかし私の実力ではアメリカで研究者として一本立ちする自信はまったくなく、また、数年後に日本に戻ってそれなりに研究のできるポジションに就職できるという確信も持てなかった。今回は以前の大学院進学の時のような激しい悩み方はしなかったが、それでも帰国前の数か月は、昼間に広い大学構内のベンチに座って思い悩んだりしていた。しかし帰宅後には、タププリとあった時間を家内や娘と楽しく過ごし、夜眠れないこともなかった。そのうち、何の結

論も出ないうちに帰国の日がやってきてしまった。空港に向かうリムジンバスの中で流した涙を最後に私のこの悩みも断ち切られた。時間の流れ(タイムリミット)と私の決断力のなさが結論を出してくれたようである。

またまた悩んだ

その次の大きな悩みもそれからまた10年ほどして現れた。当時、私は40歳を過ぎて、まだ出身研究室の助手でいた。上が詰まっっていてどうにも動きが取れない状況だった。尊敬する先生方からは、「助手は長くても40歳まで。40を過ぎたら一国一城の主となってそれまでの経験を活かして本当の自分自身の研究をなさい。」と若い時から吹きこまれていた。にもかかわらず40歳を過ぎて出身研究室に留まっていたのは、講座担当教授が2代にわたり私の研究に理解を示してくれて、大学院時代からずっと自由に研究させてくれただけでなく、助手になってからは毎年優秀な大学院生を私の研究グループに付けてくれたことが大きな要因であったからだと思う。それでも40代も半ばに近づき、いよいよ本当に何とかしなければと思い始めた時に、ある地方の国立大学から思いも掛けない好条件で「来ないか」という誘いをかけていただいた。当時助手だった私を教授で雇ってくれるというような話だった。その大学、学科では私の尊敬する年長の先生と私と同年代の親友が教鞭を取っており、お二人とも私と似た分野の研究をされていた。そこでならば、3人で協力して一つの研究分野について日本を代表する拠点ができるという確信が持てた。その候補地を訪問し、セミナーを行い、学科の先生方とも懇談をして、おそらく概ねの了承が得られて、いよいよ具体的な処遇などについて本格的な話し合いに入ろうというところまで話が進んでいた、と私は理解している。ところがそのような状況の時に東大農学部で大きな機構改革の話が本格化し、その影響で私の上を覆っていた天井が一気に開いて、在籍している研究室の助教授になるという話が沸き上がってきた。正直に言うと、今度の場合、もうこの時点では悩みはなかった。お声をかけてくださった先生方に事情を説明し、それまでの話をすべて反故にしてもらって、素直に出身・在籍講座の助教授になった。この時点で私の「4行教授」としての研究者の一生がほぼ確定した。今この年齢になって、あの時に機構改革があつたら半年遅れていたらその後の私はどうなっていたのか考えることがよくある。東京より恵まれた生活環境、ゆっくり流れる時間の中で、充実した研究生活を送れたであろうか。娘はどんな育ち方をしたであろうかなど。

しかし決して両方の生き方を試してみることができない以上、自分が実際に進んだ道が正しかったと信じる以外に術はない。与えられた自由と制約の中で、現実の生活を、家族をはじめとする周囲の人達と楽しく充実したものにするほかに道はない。

この後の私の研究者生活は平坦そのもので、皆さんの参考になりそうなことは少しもない。ただ与えられた環境、特に優秀な共同研究者と比較的豊富な研究費と比べて、私の成し遂げた研究成果があまりに小さかったことに恥ずかしさを覚える。これは私の「研究者になってこれをしよう」というモチベーションが弱かったことに起因するのではないかと、また勝手な言い訳を考えたりしている。

生涯の研究テーマ：水素細菌とともに

ここまで私は自分が人生の岐路に立った時に、その行き先をどのように決めたか、正確に言うると行き先がどのように決まっていたかを書いてきたが、自分の研究テーマそのものについてはまったく触れてこなかった。というのは実際問題として自分の研究テーマの設定、選定について余り書くことがないからである。卒論の研究テーマは、半ば私の就職が内定していた会社の意向によって決まった。当時新しい炭素資源を求めていたその化学会社は、メタノールの発酵資源化に取り組み始めていた。卒論で入った研究室ではその関連のテーマとして炭酸ガスの有機化をあげていたので、迷わずそのテーマを選択した。こうしてまったく自主性のない中で私のオートトローフ(化学独立栄養細菌)の研究が開始された訳である。ただし化学独立栄養細菌の中で水素を食べる水素細菌を選択したのは私である。基質となる物質のエネルギーを考慮した上の判断であり、惰性に流されることの多かった私の研究生活の中できわめて稀な決断であったと思っている。正しい判断であったとも信じている。ただし定年退職まで40年間以上もこれが私の主要研究テーマであり続けたことが、結果として良かったのか悪かったのか、今でも判断がつきかねる。

いつか機は熟す

研究者を目指すとして、実際の研究テーマというものはどのように決まっていくのであろうか。多くの場合、研究の入り口の段階では、「環境問題に取り組みたい」「地球や宇宙のことが知りたい」「癌の研究に取り組みたい」などの大雑把な希望はあっても、では具体的に何をするかということになると、自分でそこまで決めることはま

ず不可能で、先人から出されたテーマのうち、なんとなく面白そうな響きのものを選ぶというのが実情ではないだろうか。試しに先日、今私が勤務している中国・西南大の生物エネルギー環境修復研究センターのポストドク応募者に、「このセンターに入ったら何をやっても良い、と言われたら何をどうするか」という質問をしたが、これに満足に答えてくれた応募者はいなかった。博士号取得者でもこの状況である。ましてや卒業研究の段階で、具体的テーマとその実施戦略を具体的に描ける人間がそうそういるとは思えない。皆、漠然とした未来への希望と制限された状況の中で研究テーマを選択し、その制限の中で自分自身の個性を發揮しつつ、やがて自分自身のテーマとして発展させていくのが常道と考えている。かつて尊敬する先生方から私がアドバイスを受けたように、いつか機が熟して自分自身が本当に思い描く研究をそれまでのすべての経験（研究経験だけとは限らない）をもとに開始できるようになることを期待して研究を続けるのだと思う。産官学、自分がどこに所属していても、またそれぞれの置かれた状況がかなり違っていても、この研究者・技術者、さらには人間としての成長過程は基本変わることはないと思っている。

人生の曲がり角

上述のことにに関して、私には想い出深い話がある。東大で助教授、そして教授になって10年目くらいの時である。私には人生の重要な節目は10年に一度くらいの間隔で訪れるらしい。それは大学院入試の面接でのこと、他大学から受験した女子学生が「もし大学院に入学できたら、免疫の仕事をライフワークにして頑張る。」と言った。私はその一途な若さに嫉妬を感じるとともに、「今の段階で『免疫の仕事をやりたい』ではライフワークにならないんだよ。これから良い先生について一つずつ成長していくとともに、次第に自分の個性を發揮して、やがては本当の自分自身のテーマを見つけてそれに取り組むことができ初めてライフワークと呼んでもいいものになるんだよ。あなたの目の前の風采の上がらない50過ぎのおっさんは、まだ自分にとってのライフワークが何であるのか掴みきれずにうろちょろしているんだよ。」と心の中で叫んでいた。おそらく私自身に叫んでいたのだろう。当時の私は新しいテーマにも若い人達と取り組んでいて、「自分は大学教授として何をなすべきなのか、何が残せるのか、また若い研究者にどのように接するべきなのか、何が与えられるのか」を真剣に考えるようになっていた。そして数年後に得た私なりの結論

は、「自分自身は研究者として限界がある、または限界に達している。今は若い人達にチャンスを与えるのが自分の役割である。若い人の成長、そのことに喜びを感じるべきである」というものであった。今になると「研究者」から「教育者」への曲がり角だったのかな、と思う。

そして道は拓ける

それからまた10年、私は現在、重慶の西南大学というところで、この大学に世界レベルの環境バイオテクノロジーの研究センターを設立するために頑張っている。大学を定年退職後に私が選んだこの道は多くの知人を驚かせたようだが、これは私にとって決断でも何でもなく、「自分の進むべき自然な道」を選択したと思っている。

私は30歳を過ぎたあたりから、大阪大学や生物工学会との関連でアジアの多くの大学・研究者と交流してきた。そして「私はそういうことが好きである」ということに早くから気がついていて、私は、日本の若者もだが、アジアの若い人達が成長し羽ばたいていくのを見るのが本当に好きだ。それと定年前の7年間、私は東京大学の生物生産工学研究センターのセンター長をした。私自身はこのセンターの構成員ではなく、私の存在とは直接関係のないことだが、当時このセンターの特に若手教員の成長には凄まじいものがあり、見ていてハラハラドキドキ、楽しくて仕方なかった。こうして定年退職後に私がやりたいことは自然に決まっていた。あとはそのような希望に応えてくれる場所があるかどうかだったが、幸いなことにかつての私の博士課程の学生であった中国の羅峰博士が西南大学にかなりの好条件で私を迎えてくれた。今回の西南大学のことに限らず、私は人生の節目節目でラッキーな思いをしてきた。私は多分無神論者だが、このような幸運に対しては自分の力以外に何か「自分の外で働く力」というものを感じ、その力の「おかげ」というものに感謝の気持ちを抱いている。

最後の節目で

20代、30代、40代そして50代と概ね10年おきに私に訪れた人生の節目だが、今思えばせめて後もう一つ、10代の頃に身を焼尽くすような失恋を経験してみたかった。また、おそらく最後となる60代の節目は決して自分の事情から生じたものではない。大学の定年退職という以前からとくに決まっていた社会的な事情によるものである。この定年退職について、私にはどこかにどうしても言い残しておきたいことがある。本来、生物工学会誌に書くことではないのは重々承知だが、これか

ら先、私に原稿の依頼があるかどうか分からないし、与えられた原稿の最大文字数にまだ若干の余裕があることでもあり、半ば無理を承知でここに書かせていただきたい。

私は15年ほど前、東大の総長補佐として東大の定年延長問題に関わったことがある。定年延長については当時、「女性の活躍の場を広げる」などいろいろな理由が語られていたが、実際には「年金の支給開始が遅れることになって、定年退職後の元東大教授が生活に困るようなことになっては問題だ。第一、世間体が悪い。」という一言に尽きる。実施された定年延長の具体案が、政府の年金支給開始を段階的に遅らせるペースに歩調を合わせていることからこのことは明白である。

今、私はこの新制度は失敗だったと思っている。特に、雇用契約の更新が必要という一応自動的ではない雇用延長制度ではあったが、現実にはそれまでの60歳定年制での教授の権限をすべて残したまま、ほぼ自動的に定年が延長されることになった。私は定年が延長されるにしても、「教授会での投票権はありませんよ」「大学院生を指導しなくても良いですよ」「給料はそれまでの半分程度で授業・実習を主に担当してください」「それが嫌ならどこからか研究費や自分や研究員の給料を確保してきて大学に賃料を払って研究を続けるか、どこか別な働き口を探してください」という制度にすべきだったと思う。そうすれば余った給料分を若い研究者の雇用に廻すことができたはずである。少なくとも定年延長教授一人に対し若手助教一人を早期に雇用できたはずである。現行の定年制度が若い研究者がポストを得るのを遅らせ、それがさまざまな弊害をもたらしたことは、その後東大の取った施策が如実に物語っている。またこれは東大という狭い限られた範囲で起こったことであるが、同様のことが、今、日本各地の各分野で起こっているのではと危惧している。若い人達には本当に申し訳ないことである。この新制度によって64歳まで教授職にしがみつき続けた私に言えることではないかも知れないが、やはりこの定年制改革は良くなかったと思う。

若い皆さんへ

ここから先はさらに私のまったく身勝手な個人的意見です。若い皆さんの参考になるかどうか分かりません。ここまで忍耐強く私の拙文を読んでくださった方は、「ずいぶん今自分が生きている時代とは違うな」という印象を持たれたと思います。私もまったくその通りだと思います。皆さんが置かれている状況は、「座って



2012年2月、バングラディッシュ・ダッカでの日本留学経験者の会の総会・講演会後の記念写真。筆者が「講演後の懇親会でビールを飲みたい」と言ったのを聞いた、かつて北大で私の集中講義を受けたという研究者が、交通渋滞の中、車でビールを買いに行ってくれた。懇親会には大分遅れて戻ってきたが、結局、宗教上の理由でそのレストランにはビールを持ち込むことができなかった。忘れられない思い出である。また行きたい。

いたら棚から牡丹餅が落ちてきて口に入った」などという甘いことはまったく考えられないと思います。必死に泳ぎ続けていないと、どこかとんでもないところに流されてしまうような状況に置かれていると思います。そのような時代を生きる皆さんに、まったくの老婆心ながら一つアドバイスをさせていただきたいと思います。それは次の二つのことをいつも念頭において生きていって欲しいということです。その二つとは、「今の時代が、歴史的に第2次世界大戦以来、もっと言うと産業革命・明治維新以来、最大の社会の変換点を迎えている」という歴史的認識と、「私たちはアジアの辺境の島国で育ってきた」という文化的認識です。ややもすると自分の意志とは無関係な方向に流されていってしまう現代、重要なことは自分が今どこに立っているかという大局的な現状認識です。そのためには常日頃からなるべく広く世界を見わたし、またなるべく多くの人や文化に接することが大切だと思います。最近の日本の若者は内にこもってあまり世界を見ようとしなれないといわれます。私はこの意見に必ずしも賛同しませんが、いずれにしても今よりもっともっと積極的に世界に飛び出していくべきだと思います。その経験が、自分の立ち位置を認識し、進むべき道を誤らないためにとても必要なことだと思っています。また文化に優劣はありません。あるのは違いだけです。異文化を自分なりに理解し、その文化と自分の育った文化との相違を面白がり笑い飛ばせるだけの「タフ」さが、これからの時代を生きて行くみなさんには必要だと感じています。それがこの3年間、中国の内陸部で生活して

きた私の実感です。

私が東京大学を退職し中国重慶に居を移して3年が経ちました。まだ多少日本との関係を残していますが、多くのしがらみから解き放たれ、概ね自由な身の上になりました。現役時代関係を持った先生方の多くもすでに第一線を離れておられます。ということで今回、書く内容に困窮したという事情もあって、今まであまり書かなかったことを思い切って書くことにしました。もしこれを読んで気分を害された方がいたらお詫びいたします。本拙文は決してそのような目的で書かれてはいません。ノータンキでお酒を飲んでいればそれで良いというグータラな私でも、それなりに迷ったこと、苦しんだことがある、ましてや真面目に人生に取り組んでいる若い皆さんが、苦しみ悩むことは当たり前だ、むしろできたならそれを楽しんで欲しい、そういうことを若い方にお伝えし

たくて書いています。

孔子が放浪の旅の果てに生国の魯国に戻り、教育者としての自覚から五経の編纂などを始めたのは68歳になってからでした。彼は世界一短いと言われる自伝（それでも私の4行履歴書より長い）の中で、40歳で人生の迷いがなくなったようなことを言っておられますが、私にはとてもそうだったとは思えません。私は今67歳です。孔子が「こと」を成して亡くなったのは73歳。私もまだこれからもう一仕事しても良いのではと思うようになっています。「本当に花咲くのはこれからだ」という気にもなっています。68歳まで就職活動の長い旅をしていた孔子から比べれば、皆さんはまだとても若い。まだ時間も十分にある。若い読者の皆さんが、多くの困難に立ち向かい、それを喜びに変えて人生を楽しんで行くことを期待しつつ、筆を置きます。

<略歴> 1977年3月 東京大学大学院農学系研究科農芸化学専攻博士課程修了, 1978年4月 東京大学農学部助手, 1994年1月 東京大学農学部助教授, 1996年7月～ 東京大学大学院農学生命科学研究科教授 (応用微生物学研究室担当).
1983年4月～1984年10月 米国ワシントン州立大訪問研究員, 1999年10月～2000年9月 東京大学総長補佐, 2005年6月～2007年5月 日本生物工学会会長, 2006年4月～2013年3月 東京大学生物生産工学研究センター長併任, 2013年3月 東京大学定年退職, 2013年5月～ 現職.

<趣味> 日本にいる時は若い人達とお酒を呑んでいろいろな話題について話すことが一番の楽しみでしたが、今は中国語でそれができないので、中国の歴史・文化についての本を読みあさったり、各地を見学・旅行したりしています。